

## 単なる補佐役ではなく運営の主体として—インドネシアのカカオ農園で働く女性たちから得た教訓—

Ms. Marisna YULIANTI (インドネシア)

暑さの厳しい木曜日の午後。カカオの木々の緑に囲まれた場所で、農園の男女が集まって土壌 pH の管理法と害虫防除についての講習会に熱心に耳を傾けています。「これで土壌 pH の計算方法と、カカオの木への効果がお分かりになったでしょう。何か質問はありませんか、Pak<sup>注</sup>（男性の皆さん）？」（注：インドネシア語で男性に対する敬称）とファシリテーターの女性が質問を募ります。ひとりの男性が手を挙げたのを皮切りに、良質なカカオ豆を生産するために土壌 pH を管理することがいかに重要であるか、ということについてのディスカッションが始まりました。その間もずっと、農園の女性たちはあまり発言をせず物静かなままでした。後ろの方で黙って腰を下ろしている彼女たちの存在は、男性たちとは異なり影が薄く感じられました。男性の方が人数で勝っているからなののでしょうか？それとも「自分たちは場違いだ」と感じているからなののでしょうか？その答えは、いまだに分かりません。

ジェンダー平等の考え方は、生活のあらゆる分野において、女性と男性が等しく参画し関与することに重きを置くものです。開発に関しては、計画から実施まで全ての段階において女性と男性の双方が関わっていく必要があります。そうすることで、女性と男性が平等に開発をコントロールし、その恩恵を享受できるようになるからです。国連が明確にしているジェンダー平等の概念とは、女性と男性が同様に平等なアクセスと機会を得られる、というものです。すなわち、ジェンダー平等は基本的人権であるばかりでなく、平和で豊かな持続可能な世界に必要な不可欠な礎でもあるのです。また最も重要な対象として、社会から取り残され周縁化されている女性や女兒に焦点を当てています。女性のエンパワーメント化を図り、女性があらゆることに関与を強めるよう推進していくことで、ジェンダー平等の実現に近づきます。数多くの政策やプログラムが、様々な領域における女性の参加率を 30%以上に設定するようになっています。それは、政治における国会議員の割合から研修における女性の参加率に至るまで、実に様々な分野で見られます。あの暑さの厳しい木曜日の午後にカカオ農園で行われた、ちょっとしたディスカッションも然りです。しかし、「出席」や「参加」とは実際に何を意味しているのでしょうか？果たしてそれが本当に、女性がより多くの機会を得たり、資産を管理したりすることに寄与するのでしょうか？

あの農園でレクチャーを受けていた男女のグループに出会った後も、私たちは女性たちと何度か会いました。このグループはカカオ豆の生産量と品質を高めるために、国際機関による支援とキャパシティ・ビルディングを受けているのです。このグループの女性の大半は、農園で働く男性の妻です。中には父親のカカオ農園を手伝っている娘たちも数人います。私たちが彼女たちと再び会った時は、女性だけの集まりだったこともあり、より活発で元気に満ちている様でした。今ではカカオについての知識も増え、生産するカカオ豆の品質が良くなったおかげで、家計収入が二倍になったと話してくれました。さらに、女性たちの農園管理能力が上がったために手伝いの人員を雇う必要がなくなり、家計からその費用を削減することができたということです。またそれだけではなく、家庭内での男女の関係にも変化が見られるようになったということです。農園について何らかの判断をしなければならない場合、女性たちが夫から相談を受けるようになったり、夫婦間での話し合いが以前よりも増えたりしているそうです。

このような予想以上の変化には驚かされます。研修に参加していた女性たちは、都合で来られない夫や父親の代理として参加していたもので、農園では単なる手伝いとして扱われる存在でした。そのことが講習会での女性の扱いに反映され、ファシリテーターの意識が世帯主であり土地と農園の唯一の管理者としての男性の方に集中してしまい、女性たちは二流の農園労働者として後方の席に取り残されていたのです。このようなステレオタイプ化は、女性たちの自

分自身に対する捉え方にも明らかに影響を与えていました。彼女たちの一日の時間の使い方や、農作業における男女間の労働分担に関するデータを見て明らかなのは、農園における作業のかなりの部分を担っているのは女性だという事実です。それでも、彼女たちに「誰が最も農園に貢献しているか」という質問をすると、すかさず「夫です」という答えが返ってきます。これに対し、「自分はただの手伝い」というのが、彼女たちが自分の役割を説明するときを使う決まり文句になっているのです

農業、経済、および主な開発セクターにおける女性の役割や貢献が十分に認められていないという問題は、実際に完全には解決していません。インドネシアにおける関連法や規制には、いまだにジェンダーの認識が無いものや、場合によってはジェンダーに基づく偏見を含むものまであります。ちなみに、婚姻法（1974 年第 1 号）では、男性が「家計を支える世帯主」と明記されているのに対し、女性は「主婦」となっています。しかし実際には、2013 年にインドネシア中央統計庁が行った調査によると、農業部門における農業従事者のうち女性が 23%を占め、生産年齢の女性の 55.04%がインドネシアにおける労働力に参加しています。このように、統計の数値上では女性の活躍が明らかであるにもかかわらず、現実には女性の存在はあまり認められていません。自分の家の農園やプランテーションを運営するためにどれだけ懸命に働いたとしても、女性たちは単なる補佐役という扱いしか受けられないのです。また、家計にどれだけ貢献したとしても、女性たちが得た金額は、単なる追加分としてしか見なされません<sup>7</sup>。女性たちはこのようなジェンダー・ステレオタイプに抗おうとたゆまぬ努力をしていますが、それでも行き詰まっており、いまだに家庭のことを最優先させるよう求められているのです。このように、家計を支える存在、あるいは経済改革の担い手としての女性の貢献は、これまで十分に認められることはありませんでした。

ここから得られる唯一の教訓は、女性が参加し積極的に貢献すれば、好ましい変化が生まれる、という紛れもない事実でしょう。政府や社会全体で、女性がある存在感を高められるだけの余地を与える必要があるのです。また、女性の労働力参加率などの数的な調査を行うだけでなく、ディスカッションの中や建設的な変化をもたらす上で女性が果たす貢献や役割など、質的な記録を行っていくことも必要です。これに加え、女性に対してさらなる参加を促すための取り組みも求められます。例えば、会議などで女性の存在に目を向け、女性だけを対象とした研修を行い、女性の時間や都合に合わせた活動を行うなど、様々な試みが考えられます。そうすることで、女性は自分たちの参加が求められているばかりでなく、それが必要不可欠なことなのだという意識が高まるのです。そのうち、カカオ農園の女性たちも胸を張って最前列に座り、誇りを持って挙手する日が来ることを願うばかりです。そして、勇気を出してこう言って欲しいのです。「私たちはただの手伝いではありません。農園運営の主体として貢献しているのです。だから、私たちの存在を認めてください」と。



ディスカッションで声を上げるカカオ農園の女性たち